

嘘つきは内定のはじまり。

最初にそのフレーズを思いついたのが誰なのか、私は知らない。テレビで発信された言葉でも、就活雑誌に載せられた文句でもないだろう。ネットの片隅で呟かれた言葉が、いつの間にか市民権を得て広がっていくことがある。それはその言葉に、皆が共感したことを意味している。

検索窓に見知らぬ氏名を打ち込みながら、私がときどき考えるのはそんなことだ。

「それでは二本橋さん。学生時代、力を注いでいたことを教えてください」
隣に座っている前園が言って、顎の下で手を組んだ。

長机が一つにスツールが四つあるだけの、簡素な面接室だ。スツールは三つが壁際の長机に沿って並び、受験者用のものだけが少し離れた部屋の中央に、見世物のように配置されている。腰掛けた学生の背は、木の棒のように伸びている。両手は膝の上に乗せられて、軽く握られていた。

「私は一年から三年までの間、大学のボランティアサークルに入っており、老人ホームを対象としたボランティア活動に力を注いできました」

「それは素晴らしいですね」

前園がにこにこ相槌を打つ。

「その活動の中で、感じたことや、得たこと、成長したことなどがあれば教えてください」

「記憶に残っているのは、去年の三月に区内の老人ホームを訪問したときのことです。会話相手になるだけで、おばあさんがびっくりするくらい喜んでくれました。その笑顔がずっと印象に残っていて、いろいろな老人ホームを回るうちに、人のために何かをしたい、社会貢献をしたいという気持ちが強くなりました。人として成長できたのではないかと思っています」

「それは素敵ですね」

ここ数日、似たり寄ったりな体験談を毎日聞き続けている。それでも前園は、毎回まるでとても興味を持っているような素振りで話を聞く。相手の口を滑らかにして話を引き出す技術はさすがだ。もう二回りほど若くて痩せていてイケメンだったなら、人事部長ではなく、ホストをやっていただろう。

開発の寺田部長は、机の上に置かれた履歴書に視線を落としたまま、顔を上げない。学歴欄と

資格欄を流し見し、技術用語を踏まえた質疑を二つぶつけたあとは、まるきり興味を失った様子だった。

「志望動機を教えてください」

「御社は七星グループの中核企業として、システムサービスを通して広く社会に貢献しております。私は人のために何かをしたいという願望が強く、人の役に立つシステムを作り続ける御社の下でならばそれが叶うと考え、志望致しました」

面接シートには、新入社員面接におけるチェック項目が並んでいる。チェック項目は多岐に渡っており、『第一印象』『志望動機』『服装』『態度』『話し方』『積極性』『協調性』『専門性』などの項目が各五段階評価で並んでいるほかに、『学生時代に得たもの』、『(同業他社ではなく)弊社を志望した理由』などの自由記述欄が配されている。

寺田がペンを走らせているので、何か特筆すべきところがあったのかと盗み見てみると、ドラえもんの落書きをしていた。なかなかうまい。

私は顔を上げて学生の話に相槌を打ちながら、ノートパソコンに置いた指をそつと走らせた。メモをとるためではない。検索するためだ。面接前の休憩時間に、既にそれらしいウェブサイトは見つけてあった。

履歴書欄に書かれた学生の名前は、『二本橋卓也』。『二本橋 卓也』を検索エンジンに打ち込むと、四十七件のヒットがある。類似記事や検索ノイズを除去してまとめると、『二本橋卓也』に關係するサイトは、三つに絞られる。

一つ目は『二本橋卓也のたたくブログ』。盆栽が趣味の沖縄在住のおじさんです、とプロフィール文がある。記事の文体、言葉の選びも、若者のものではない。次に電子掲示板。この投稿も、沖縄在住の二本橋卓也のものだ。

三つ目のサイトが有力だった。大学合同ボランティアサークルのウェブサイトで。メンバー欄に『二本橋卓也』の文字があり、大学名が履歴書と一致している。名前をクリックすると個人ページに飛び、さらにリンクを辿ると『徒然なる日記』というタイトルのブログに行き着く。プロフィール欄に『takuya.N』とあり、記事カテゴリに『就活』という単語が含まれている。

ツールを立ち上げ、ページ内検索ウィンドウを開いた。机に広げた履歴書を確認し、『二本橋卓也の出身大学である』、『立零大学』と打ち込む。ブログ全記事の中で七件合致し、『うちの大学』『母校』といった語と共起している。年齢は二十二。出身は千葉県四街道市。出身高校は私立坂上高校。一浪。『四街道』『坂上』『予備校』。打ち込み、履歴書とブログの繋がりを丹念にチェックする。

記事の一つに、プリクラの画像が貼られているのをみつけた。髪を逆立てた金髪の男が、金髪の女と腕を組んで、中指を立てて舌を突き出している。

モニタから顔を上げ、背筋を伸ばして座っている学生の顔を窺った。

間違いない。黒髪で、鼻にピアスもないが、同一人物だ。

「差し支えなければ弊社の志望度をお聞かせ頂けますか」前園が言った。

「第一志望です。他の会社は考えておりません。是非とも御社に入社し、皆様と一緒に働きたいと考えております」

ブログの最新記事を呼び出した。昨日の日付だった。

【明日は七星システムズの一時面接。子会社とかやる気起きねー。適当にエントリーシート書いたし、志望度○だからなんも調べてない。すっぱかしたいけど仕方なく行ってくる。圧迫面接とかされたらキレるかもw】

日記を遡った。

最近の記事は、ほとんどが落ちた会社の悪口か女の話題だ。去年十月の記事では、合同説明会に参加していた各企業の女人事の胸の大きさと、誰を犯したいかリスト。同月二十日には説明会に遅刻しそうになって駐輪場から他人の自転車を盗んだことを自慢げに記述。

『ボランティア 老人ホーム』でページ内検索をかけた。ヒットした。

【今日はサークルの活動で老人ホームへ。就活で有利になるって聞いて入ったサークルだが初めて顔出し。老人ホームは最悪。ジジババ話長すぎ。うざいからババアの服にお茶ぶっかけて話切ってた。そしてかけたの俺なのに謝るババア（笑）とつとくたばれ糞老害。若者の負担増やすな。】

過去は嘘をつけない。表で繕うのが上手くても、ネット上で無防備な人間は多い。細いケーブルの向こうにいる百億の人間を、リアルに感じることは困難だ。

嘘つきは内定のはじまり そんなことは認められない。表の面接だけでは弾けない裏の人間性を濾過するのが私の仕事だ。

面接シートの自由記述欄にサイトのアドレスを引き写し、下に大きなxを書いた。ブログの記事をいくつかピックアップして保存する。カチリと音を立ててノートパソコンを閉じた。

前園が時計を確認し、締めにかかった。

「それでは本日の面接はこれで終了です。結果は一週間以内にメールで通知します」

「ありがとうございます！是非ともよろしくお願い致します！」

二本橋卓也は朗らかな声でそう言つと、ドアの前で「失礼します！」と元気いっぱいなお辞儀を一つし、面接室を出ていった。

*

「なんか虚しいよ、タカちゃん」

「またですか早紀さん」

乾杯を終え、ジヨツキを呷ってから愚痴をこぼすと、高橋雄大は海老のしつぽを口にくわえたままくつくつと笑った。お通しをさっさと空にして唐揚げや焼きそばに手を伸ばし、丸い体をさらに丸くしようと頑張っている。

雄大とは同期入社のみよみで、たまに居酒屋で安酒を一緒に飲む程度の仲だ。温和な気質の雄大は、何を愚痴ってもくつくつと笑って受け止めてくれる。いつの間にか、人事部内で零しく

い類の愚痴は雄大に零す、という習慣ができてしまっている。

二本橋卓也のことを話して聞かせると、雄大は鞆からノートパソコンを取り出し、ブログを辿った。すっかりできあがってしまった様子で、記事を読みながらこれは凄いと繰り返し、一人で笑っている。

「こういうのどうやってみつけるんですか」

「基本は公共度の高いページを入りに、徐々に私的なページを辿って。本名で検索して、サークルとか研究室のページを入りに絞り込む。最近はSNSも非匿名が多いしやりやすいね。」

コツがいるけど慣れると早い」

「へえ。ちょっと格好いいな、ネットプロフィール。WEB系の開発者としては興味をそそられますね。どれくらいの割合で相手の情報が引き出せるもの？」

「履歴書の情報量にもよるね。ユニークな名前や経歴を持つる人はすぐ見つかる。個人ページまで特定できるのは多くないな。掲示板の書き込み程度の情報も含めるなら結構とれる。確度が低い情報は参考にしないけど」

「ふうん。確実性には遠いけど、無視できない情報量つすね」

「毎日毎日、表で熱い想いの言葉を聞きながら、裏で垂れ流しの悪罵を読むわけ。人間不信にな

る」

「早紀さんは思いつめるからなあ。新卒面接なんてあることないこと言っただけじゃありませんか。適当に流しとけばいいんですよ」

開発部署の雄大は、新卒面接に関してあっけらかんとしたものだ。彼らは人事の仕事を用意しない。もちろん彼らにとっても、新しく配属されてくる新人は気になる存在のはずだが、その選抜については当たるも八卦当たらぬも八卦程度に考えている。

人事部長の前園は、面接でのやりとりを通して学生の人間性がわかると信じている。そんな自信を持ってもらえるのは、入社直後の爽やかな仮面を決して外さない新入社員としか接しないせいだ。教育を終えて部署に送った後のことなど知らないし、プライベートでどうしているかなど思いもしない。前園は私が上げた調査詳細にも目を通そうとしない。本社の指示なのでしぶしぶ制度に従ってはいるものの、機械嫌いの前園にとって、ネットの情報を採用活動の選考材料に使うなど、到底受け入れがたい発想であるらしい。

私の考えは違っていた。たかだか三十分の面接で、相手の本当の人間性など、わかるわけがない。

昔からそんな風に考えていたわけではない。入社して人事部に配属された当初は、目を輝かせた学生が将来の夢や希望を語るのを聞くような、青臭いイメージを抱いていた。だが目を輝かせてやってくる学生などいなかった。学生たちは面接室に入るときに、輝いたシールをぺたりと貼って、退出したら丸めてゴミ箱に捨てるのだ。瞳の奥で彼らは、目を輝かせて何になる？ と言っている。

（自分の言葉で話してほしいのです）

昔、新卒で受けた面接で、私はある面接官にそう言われた。受ける会社受ける会社落ちて焦り、面接教本を熟読して、忠実になぞるように話をしていたら、にっこり笑って言われたのだ。

（あなたを雇うかどうか決めたいのです。本の著者を雇うかどうか決めたいのではありませんよ）
それで何かが吹っ切れた。やけくそ気味に語り始めた内容は支離滅裂だったが、口から言葉が零れるのと一緒に、ずっと眠って凝り固まっていた気持ちも、起き出して胸に馴染んでいく気がした。結局途中で落ちてしまったが、あのときの面接官の言葉がなければ、私は就職活動を最後まで続けることができなかったかもしれない。

だからこそ面接をするときは、相手の想いを引き出してやりたいと思う。それでも木霊のようなやりとりを繰り返すうちに、胸の内で情熱が薄れていく。そうしていつの間にか学生を「ハズレの少なそうな集団を作ったらたまたまあなたが入っていた」とふるい分けている。それに気付

いたとき、私は仕事にやりがいを感じる事ができなくなっていた。

「まあまあ。そのうちいいことあるって。型に嵌まらない学生が来て、乾ききった早紀さんの心に情熱を注ぎ込んでくれるとかさ」

そして確かに、型に嵌まらない学生は来たのだった。悪い意味でだが。

雄大と飲んだ三日後のことだ。書類仕事を終え、学生の情報を蓄積しているところだった。ネット上には沢山の就活コミュニティサイトがある。そこで企業の名前を検索すれば、情報交換している学生の書き込みを大量に採取できる。そこから個人プロフィールに飛び、応募履歴書と突き合わせていけば、比較的容易に学生を特定することができるのだ。

その書き込みへの一行リンクは、七星システムズの情報交換スレッドの中に、差し挟むように書き込まれていた。

リンクから辿った書き込みに、私はマウスを握っていた手を止めた。

【投稿者：奏でる死神 株式会社ソ×テキスト

ジグ、ジグ、ジグ 墓石の上 踵で拍子を取りながら

真夜中に死神が奏でるは舞踏の調べ ジグ、ジグ、ジグ ヴァイオリンで

冬の風は吹きすさび 夜は深い 菩提樹から漏れる呻き声

青白い骸骨が闇から舞い出で 人事の月 彰を殺害する

ジグ、ジグ、ジグ 豪華な衣装でふんぞり返って

ジグ、ジグ、ジグ 骸骨のせつかくの骨を見てくれなかったから】

正直に生きるのはこれで終わりにする。

合否結果のメールを見つめながら、僕は最後の確認をした。

結果はわかっていたのでどうということはない。何度か面接を受けるうちに、振る舞いとして何を求められているかは把握したつもりだ。

だが理解することとそれを受け入れることは別問題で、なかなか踏ん切りはつけられなかった。結局それは嘘について器用に生きるか、不器用にでも正直に生きるかなどという、僕の中の青臭い感情的な問題でしかなかった。

正直に臨んだ場合にどうなるかはわかっていた。それでも最後に試しておくことにしたのだ。社会に出る前に、自分の中に残った最後の青臭さを、断ち切るきっかけが欲しかったにすぎない。

【貴殿の今後の益々のご活躍をお祈りしております。 株式会社ソルテット】

就職面接の不合格を告げるメールの末尾には、学生の今後の活躍を祈る文が付けられるのが慣例だ。原文からのコピー&ペーストでメールに貼り付けられ、名前の部分だけにかろうじて僕の個性が当てはめられた文面が、僕に対して一心に祈りを捧げていた。

新卒で就職できなければ人生終了。ネットで囁かれる後ろ向きな言葉が、現実とそうずれていない事実が垂れ流され続ける時代の中で、僕らは育った。この社会がミスをしたら這い上がれない蟻地獄構造であることくらい、余程抜けている奴以外みな気付いている。

僕らはただの商品だ。想いはいらぬ。

求められるのは商品価値だ。オーケー、わかっている。

【勝ち逃げ】

いつの頃からかネットのコミュニティはそんな言葉で溢れた。

【こんな糞みたいな社会にしたのは、偉そうに面接とかしてるあいつらの方なのに】

僕はパソコンのブラウザを立ち上げると、ブックマークを開いた。

【^面接評価裏クチコミサイト^】

当サイトは各社の新卒採用面接について、面接を受けた学生の皆様の率直な感想・批評を収集しています。

学生の皆様は就活の中で、評価を受けて、競争を行い、切磋琢磨していることと思います。同様に、日頃は評価をする立場である人事の皆様にも、評価を受けて、競争を行い、切磋琢磨して頂く機会を設けるのが、当サイトの目的です。

収集された情報の閲覧は自由です。学生の方は、企業選びの際の参考にしてください。企業の方は、人事担当の方の評価にご活用ください。

管理人 Memento】

閲覧は自由。書き込みがアカウント作成済みユーザに限られているのは、荒らしや質の悪い私怨評価を減らすためだ。ユーザ登録ページには名前と住所とメールアドレスの入力欄があるが、名前と住所をともに書く奴は多くない。登録するとドメイン内に個人のプロフィールページが用意され、スケジュール管理などの各種機能を利用できる。ただのおまけだ。

主眼はクチコミ。ログインすると表示される投稿用フォームには、企業名の記入欄と、評価項目が並んでいる。『メールの印象』『態度』『話し方』『聞き方』『真剣味』『合否決定の透明性』『発表の迅速さ』などの項目が各五段階評価で並んでいるほか、自由記述欄が配してある。企業名はフルネームを入力しても、伏せ字にしても良い。特定の人事名に触れる場合は、伏せ字かイニシャルで表記するのが暗黙のマナーとなって定着している。

カウンタは開設後一ヶ月あたりから急速に増加していた。適度に混ぜ込まれたファニーな雰囲気と、ほどよく自己顕示欲を煽る評価システム、鬱屈発散に正当性を与えるランクシステム、まとめブログなどとの連携の効果だ。

多くユーザの目的は、正確な情報の取得などではない。それを基点としたコミュニケーション。閉塞していれば尚更だ。お行儀の良い大手就活サイトがカバーしない部分にターゲットを絞った作り。

明日面接予定の企業の評価をチェックした。

【投稿者：tak 七星システムズ

上手くいったと思ったのに落とされた。評価基準が不明確。しょせん学歴しか見てないっぽい。面接官のやる気のなさが異常。】

【投稿者：Y 七星システムズ

と同じ投稿のあるブログを発見。過去ログ見たけど、人事の真贋は正しかったと思うよ、二本橋卓也さん。顔出してこんなブログ書けるのはある意味凄いけど。】

モニタを見ながら思わず笑った。なかなかのカウンターだ。ブログのリンクをクリックすると、既に消された後だった。

匿名の下ではリアルな地位も肩書きも無意味だ。誰も彼もが区別なく同じ土俵の上で、泥にまみれた取っ組み合いをしている。

その凄惨なやり取りを観ているのが、僕は好きだった。波風ひとつ立てると致命的な現実と違って、ここでは皆好んで争い罵りあう。きっと皆、何処かに何か消化しきれないものを抱えているような気がして、商品ではない人間の存在を感じられる。

さて、と一つ伸びをすると、マウスをクリックし、投稿用フォームを呼び出した。企業名の欄に『株式会社ソ×テ×ト』と打ち込む。文面はすでに考えてあった。

何処で実行しようか迷っていたが、ここでいいだろう。別にどの会社でも良かったのだが、単にタイミングの問題だ。

これは勝負だ。僕と彼との。

僕はソルテットへの評価を記述した。

いや、これは既に評価とは、言えないのだけれど。

「ほんとにうちの応募者なの？」

雄大がモニタを凝視している。

「うん。明日面接予定の会社に、うちの名前がある」

書き込みに記された名前は『奏でる死神』。クリックすると、評価サイト内のプロフィールページに飛んだ。二十二歳という年齢の他に、詳しい個人情報は見当たらない。スケジュール欄は公開設定になっており、今後の予定として明日の日付と七星システムの名前が記されている。

面接評価裏クチコミサイト。近頃大きくなってきた就活サイトで、人事たちに嫌われている評判の悪いサイトだ。私も好きではないが、職務上見ないわけにもいかずチェックしている。それでもこんなものはじめて見た。

「悪趣味な詩だな」

「これ、どうしよう……」

「前園さんには相談した？」

「話してはみたんだけどね。眉しかめてこれだからネットは、って。あまりこつこつこの見たくないみたい」

「そついう問題かなあ。こつこつこの書く奴、入社させてほしくないんだけどな。一応これ、殺人予告してるし」雄大が口もとをひん曲げた。「ネットの書き込みに警察も目を光らせてるご時勢に」

「通報となると独断では動けないよね。でも本社に確認したら、十中八九、通報するなって言われるだろうし」

七星本社は、ネットプロフィールを公にしたくない。ネットでの情報マイニング自体はもはや珍しくもない。だがそれはマスターの解析の話であって、個人が特定できるデータについては、それがネット空間に公にされているものだといっても、特に大企業においては取り扱いに抵抗があるのが一般的だ。

七星グループは、人に優しい企業グループ、をイメージ戦略の中心に据えている。採用活動についても人間性を重視した選考を前面に打ち出していた。ネットでこそこそ嗅ぎ回っている。そんなイメージを避けたい本社は、通報して事を大きくしたがるらない。

「まあ、通報までするものでもないんじゃないかなあ」

雄大が肩を竦めた。

「僕もネットジャンキーだからこういうのたまに見るけど、ほとんどが単なる自己顯示か憂さ晴らしですよ」

「殺人予告だつて言ったじゃん」

「僕が嫌なのは、こういうの書く奴と一緒に働きたくないってことです。ほんとに殺すと思ってるわけじゃない。本人こんなもの書いてドヤ顔してるんでしょが、現実で発散できないストレスをネットで吐き出してるだけの小心者ですよ。マスコミは騒ぎ立てるけど、ほとんどは実害なんてありませんね」

「本当に事件が起きることもあるでしょ」

「ごく稀にね。だから警察も動きはします。でも本当に危険そうなものから捜査するから、そうでないものは後回しになる。こんなんじゃ、運良く見せしめ枠にでも入らない限り動きませんよ。万一の可能性のために人手を割けるほど、警察も暇じゃない」

それはそうなのかもしれない。だが、言うなれば私は第一発見者なのだ。他にも同じページを見ている人はいるだろう。でも通報してくれているかは心もとなかった。やはり本気にしないだろう。通報をしなかったことよって、万が一この相手に実際に害が及んだら、夢見が悪い。

これを書いた人間は、本当に殺意を持って行動を起こす人間なのか。それとも単なる憂さ晴らしで止める人間なのか。

問題はそこだ。

ネットの簡素な書き込みからでは、その判断をつけることができない。書き手の顔すらわからないのだから。

「本人に確認でもできればいいんだけどね。本気？　って」雄大が苦笑した。「まあ、冗談はともかく」

「いや、名案かもしれない」

私が言うと、雄大は目を瞬いた。

そつだ。ネットの書き込みから真意は見えない。無味乾燥な文字列から人間性を推し量るなどできない。データではなく、顔を突き合わせそれを見通すのが、私の本来の仕事だったはずだ。

私はデスクの抽斗を開け、履歴書を取り出した。明日面接を受ける学生たちの履歴書は、四枚貼られた写真の中から彼らの醒めた目が、じつとこちらを見上げている。

私も、こんな殺人予告が本気だとは考えていない。ただこんなものを書く学生が何を考えてい

るのか理解したいのだ。真意の見えない空疎な言葉のやりとりを続ける仕事に、うんざりしていた。抽斗の中には転職雑誌が、ふんぎりがつかずに仕舞い込まれたままだ。

誰がこの文面を書いたのか。何を思ってこんなものを書き込んだのか。その心の内を見通したい。きつと、何か、あるはずなのだ。こうしたことをする学生なりの想いが。

それができれば、木霊のような言葉を喋る彼らを、理解できるのではないかという気がする。

向かい合うのだ。

それが面接だ。

正直な面接をこなすつもりはもうない。

僕は検索エンジンに自分の名前を打ち込み、検索結果を精査した。今日びネットを辿ってくる企業くらいいくらかでもあるだろう。日頃から自己の情報のメンテナンスくらいしておかないと、思わぬところで足をとられかねない。

所属している研究室のページと、昔やっていた楽器関係のページが引っ掛かった。特に問題はないだろう。

これからは言葉と態度を心と切り離して臨む。本心で喋るなど不要なことだ。難しかったのは決意するまでだけで、割り切ってしまうえばあとは簡単だった。

（君が割り切ったなら、もう何処でも受かるだろうな。なんだか、置いてかれた気分だ）

僕の友達はそう言って笑った。

（僕はまだ割り切れてないな。確かに、そういつもんだとは思うんだ。でも世の中、そんな風にしていないと生きていけないなんて、信じたくないんだ。我ながら子供っぽいこと言ってると思っけ

ど)

寂しげに笑うその友達とは、子供の頃からの付き合いだ。中学も高校も一緒の腐れ縁。性格はまるで噛みあってないのに、何故だかウマがあつていつもつるんでいた。

彼は昔から、馬鹿正直で誠実な、世の中にとってのいいカモだった。大学ではボランティアサークルなんてしていた。散々他人の世話を焼いて働きまわった拳句、なにを顧みられることもない。それでも気にせず笑っている彼を、僕は半分侮り、半分尊敬している。

嘘をつけばいい。つかないにしろ、飾り立てればいい。

エピソードを飾りつけ、綺麗にラッピングして並べてやれば面接官は納得する。みんなそうしている。就活は既に市場となり、一部企業の狩猟場だ。マニュアル化された面接に、自分の本当の想いなど、伝える必要も価値もない。

社会にとって僕らは商品だか歯車だか消耗品だかだ。その程度の扱いをするものに、敬意を払う必要もない。

(まったく。きみもじゅうぶん、子供っぽいな)

彼はそう言って笑い、僕は捲し立てていた持論の幼さに自分で慚然とする。彼は首を振る。

(きみの言うこともわかつてる。面接官がそういう話を求めていることもね。相手の求める話を

することは、必要だとは思つんだ)

(商品売るにはニーズと合致させる必要があるってことだ)

(わかつてる。でも人は商品じゃないだろ)

(社会にとっては商品だ)

(それをやって受け入れられてしまったら、僕はこの先、世の中を侮ってしまうような気がするんだ)

そう言う彼の目は真っ直ぐなのだ。

(子供っぽいことを言ってるのはわかつてる。でも、じいちゃんに言われて育つたんだ。自分に正直に、誠実に生きる。取り繕って生きるより、結局はそれが幸せの道だし、いつか絶対報われるものだからって。その教えは守っていきたいんだ。だから僕はきみの考えに同意できない)

(言ってるよ)

完璧な嘘つきになると決めた僕の心は、彼の澄んだまなざしに千々に乱れる。僕は彼を嘲り、心配し、羞恥を感じ憧れを感じる。清廉なカモは嫌いじゃない。それでもカモが無事に生き続けられるほど、この世は綺麗な湖じゃないんだ。

僕は彼を尻目に、言葉と論理と適度な感情を弄び、真つ当な人間として活動をはじめた。そう

して統御された表面的な人間性を完遂してはじめて、社会は僕を受け入れはじめた。けれど底の浅い虚飾をこそ得心したと頷く人々の姿に、僕の心は徐々に分離するばかりだ。浅薄。度し難い節穴。正直に生きる僕のカモが羨ましく憎い。何処にもない何かを信じてもがき続けられる彼の生き方へのこれは嫉妬だ。

彼は彼で、僕に対して、君が羨ましいとも思うと笑った。それが彼と僕との関係だった。それで。

僕らは賭けをすることにしたのだ。

社会がどちらの生き方をとるのかを。

(普通に就活なんてしてたって、面白くもなんともない。いっそ、どちらの意見が正しいか、審判の皆様にジャッジしてもらおうぜ)

(勝負とは懐かしいな)

彼は笑う。僕も笑った。それで着慣れないスーツを着込んで空疎な言葉を吐くだけの時間が少しだけ救われたような気がした。二人とも、子供のころ遊んだ心地のままだ。社会に出て行く年齢になっても、結局のところ、僕らの心はまだ青臭いガキのままなんだろう。

それでも、ずっと遊んでいるわけにはいかない。

だからこれは最後の勝負だった。世の中は僕を見抜いてくれるだろうか。人を見る目。そんなものがこの世の中にあるのなら、僕はそれを見たいのだ。

そうすれば、このくだらない世界へ飛び出していく意味をまだ持つていられる。そんな気がするから。

『テーマ：ネット上での暴言』

ホワイトボードに書くと、私は学生たちに向き直った。テーブルを囲んで着席した四人の学生が、背筋をぴんと立ててこちらを見ている。

「皆さんはあるシステム系の会社を運営しています。同僚のMさんが会社の悪口をネットで言いふらしていることがわかりました」

ホワイトボードに、さらに書き込んだ。

『Mさんの行為をどう思うか。Mさんにどう対応すれば良いか。』

「これらの内容についてグループで討議し、結果をまとめて発表してください。討議時間は十分、発表時間は七分です」

開始を告げると、脇の面接官席に引っ込んだ。前園と寺田と並んで座り、学生たちがどう討議を進めるか審査する。

学生たちは手馴れており、誰が係をやるか手早く決めた。グループディスカッションの役割については各社さまさまだが、大抵の場合、議論をまとめるリーダーと、時間管理を行うタイムキーパーについては共通している。

「リーダーになりましたので、私、林原が進行をしたいと思います。Mさんの行為をどう思うか、どう対応すればいいか。皆さん、意見はありますか？」

林原忠志がきはきと言って、ぐるりと一同を見回した。全員が様子を窺うように、誰からいこうか、と互いの顔を覗き込んだ。

グループディスカッションは、その人が集団の中でどういう役割をこなすかをみるものだ。リーダーシップを発揮するタイプなのか、皆を補佐するタイプなのか。それぞれの適性を把握し、必要な人材を選ぶ指標とする。

もちろん理想論だ。実際はわかりやすい言葉が一人歩きした結果、匙加減の難しいだけの椅子取りゲームになることがほとんどだ。印象が薄くなっただけではリーダーシップ不足と判断されるが、出すぎて他人を萎縮させても協調性不足とみなされる。学生たちは様子を窺い、自分の出方が

最適かを常に計算する。

「えっと、みなさん意見はないでしょうか？ 雪村さん、どうでしょうか？」

林原は脇の雪村里菜に振った。リーダーとしては仕方がないが、やや性急だ。微かな沈黙を議論の停滞と捉えた反応が、責任感は強いが余裕が足りない印象を与える。

机の上には七星グループ標準のグループワーク評価シートが乗っている。私は手元の林原の性格特性チェックシートに目をやった。積極性をプラス一、落ち着きをマイナス一程度が第一印象。「そうですね。私は、Mさんの行為は寂しさによるものだと思います」

雪村里菜が歯切れよく言った。

「だから対応としては、Mさんが会社のどこに不満なのかを聞きだして、悩みを聞いてあげるのがいいと思います。会社の中に、自分に共感してくれる友達がいなかったことが問題なのではないでしょうか」

「なるほど」「そういっつのはありますね」

うんうん、と皆が頷きあう。同意から入り雰囲気のを和らげるのが序盤の流れだ。ちなみに本当に同意しているかどうかは、相槌の頻度と首の傾け具合から概ね判断できる。

「他の人はどうですか」

ここからが本番だ。全員の同意は議論の収束を意味し、終盤では好ましいが、開始三分で収束しては、議論が成り立たなかったという判断になる。学生もそれをわかっているから、好むと好まざるとに関わらず、序盤では誰かが反対意見や別の見方を提示することになるのだ。

グループディスカッションは一幕の寸劇だ。面接官という観客の前で、彼らは見栄えの良い舞台を披露したいと願っている。

だが定年まで演技し続けることなどできない。面接官が見たいのは、客を意識した演技ではない彼らの日常の姿だ。仮面を剥ぐために、議論という火種を放り込む。演技としての舞台を行っているうちに、彼らは段々と自分自身を出しはじめなのだ。

さあ、死神は誰だ？ 何を考えている？

ネット上で暴言を吐く人間《じぶん》に関して、どういっつ意見を喋るのだ？

「誰か意見ある？」

「確かに話を聞くのはいいと思うんですが」

と口火を切ったのは天峰章吾だ。

「Mさんの行為が寂しさによるものといっつのは、一概に言えないかなと思っつ」

「同感ですね」と林原忠志。「単純にそれがMさんの性格なのでは？ 陰口を叩く人間って何処

にでもいますし。その吐き場所が飲み屋でなくネット上だというだけで」

「問題は、ネットという場所なのかな」と久遠坂和之。「Mさんの言動が、仮に飲み屋でなされていたら、どう思いますか？」

「良いことではないけど、ある程度は仕方ないかな」と林原忠志。

「生活する上で愚痴を吐かない人間なんていませんしね」と雪村里菜。

「ネットだと問題で飲み屋だと構わないというのは、公の場と私的な場の違いにあるのかもしれない。Mさんは、ネットが公の場で誰もが見られるということへの、認識が足りないんだと思う」
久遠坂和之が言った。

雪村は『感情』に着目し、久遠坂は『認識』に言及している。まとまるだろうか。

「ネットって公の場？」

「誰でも見れるからね。その気になれば何億って人がアクセスできる。公の場だろう」

「公の場だったら、取り締まれないのかな」

「殺人予告とかなら逮捕例もあるけど」

「聞いたことあるな」

「結構逮捕者出てるね」

「ちょっと話が反れてるけど」

雪村里菜が打ち切った。

「まとめると、どういうことなのかな。久遠坂さんの言つように、Mさんがネットを公の場と意識できてないとして、どう対応すればいいと考えますか？」

「会社の情報リテラシー教育を充実させるのがいいと思う」と久遠坂。「若い頃からルールとマナーを学べば、自然と身につくと思います」

「僕は最終的には話すしかないと思います」天峰が言った。「悪いことなんだときちんと伝える。腹を割って話せば相手もわかると思うんです」

雪村は、「注意して聞くような相手だったら、初めからこんなことしないような気がするんだけど」

「それもわかります」

「まず共感から入ってあげないと、素直に納得できないんじゃないかな」

「そうだなあ」「確かにね」

“共感派”雪村が主導権を握る。だが彼女はメンバーが首肯しつつも納得はしていないことに不満げだ。そろそろ彼らの意識は観客の視線から離れ、目の前で展開するイベントに捕らえられは

じめている。

首を傾げていた林原忠志が、ぼつりと漏らした。「でも本当にそれでいいのかな。もう大人なんだし、馴れ合ひ的なのはちょっと違うんじゃない？」

雪村里菜の表情が固まった。久遠坂と天峰が気付いて、口を閉ざした。

「学生と違って社会人の話なんだから。もう友達っていうんでもないでしょう」と林原。

「……いや、大人だからこそ人脈が大事になるんじゃない？」と雪村。

「確認なんだけど、Mさんの行為の是非については、皆さん、悪いことであるという認識でいいんですよね？」

林原の問いに、皆が迷いなく頷いた。死神は問いかけたのか、頷いたのか。

「悪いことには、まず注意では？」「コミュニケーションが大事なのはわかるけど、大人として、毅然と注意することも必要だと思う」「

「でもMさんにも言い分があると思う」「と雪村。「それを無理やり押し込めると、余計酷くなるかもしれない」

「注意されてへそを曲げる人間を甘やかすのって正しいこと？」

「相手のモチベーションを保つのは重要なことじゃない？」「子供相手にはそうかもしれないけ

ど、大人だよ？」「大人相手であっても上手い叱り方と下手な叱り方があるでしょう」「叱り方によってへそを曲げるような人なら余計にびしっと言ってやらなくちゃいけないと思う」「それは逆効果だと思う」

「両方わかります」天峰がとりなした。「自分が注意されたときに受け入れることも、他人のモチベーションを保つ注意の仕方をする 것도、どちらも必要だと思うんです」

「同感です」と久遠坂が続く。「その両方の違いを考えていくと、話が整理されるのではないでしょうが」

その後の議論は、林原と雪村の意見の相違を軸に、多少の押し引きをする形で決着した。

林原忠志がまとめた。「まとめとしては、相手に率直に注意する。でも相手に配慮して、話も聞いてあげるってことだね」

雪村里菜が続いた。「そうですね。不満を聞いてあげることがは重要。でも相手に知らせてあげることも必要だとわかりました」

学生たちが出て行った後、寺田の評価シートを盗み見てみた。

ドラえもん横にドラミちゃんまでいた。

「学生もだけど、面接する側の方も足並み揃えるべきだね、これは」

議事録と評価シートを見せると、雄大はそう言って苦笑した。業務を終えたあと社食で落ち合い、グループワークの様子を語って聞かせた。

「寺田部長と前園さん、評価バラバラだ」

評価シートを見やりながら、雄大が言った。

寺田は林原忠志の考えを支持し、雪村里菜については社会人になる者としての自覚が薄いと評した。前園は逆に、林原は持論に固執するあまり皆を萎縮させたと評し、雪村の他者への配慮を気にした意見を評価した。

人物特性については大抵意見が一致するが、結局、その評価についてはバラバラになることが多い。必然的に、面接結果は評議での各面接官の発言力や場の流れ、評価指標マニュアルとの合致度合いで決まることになる。

「で、誰が死神だと思います？」

雄大のわくわくとした声に、私は苦笑した。グループワークのテーマは、私と雄大で考えたものだ。ネットでモラルに反した書き込みをする架空の人物　このトピックで議論をするとなれば、殺人予告を書いた本人としては、自分を省みざるを得ないはず。そう踏んだのだ。

「僕はこの雪村という子が気になりますね」

雄大が言った。

「Mさんを庇うような発言ばかりしてる。死神としては、ネットで悪口を吹聴するMさんに対して、同情的な意見になると思っんです」

「ここでも選評と同じく、意見が食い違う」

私の考えは逆だった。じゃあしゃあとネットとは真逆の意見を主張してくるのではないだろうかと思っていた。

「というと、Mさんに厳しい意見を言ってる林原ですか？　人ってそんな裏表使い分けられるもんです？」

「タカちゃん、嘘苦手そうだもんね」

「僕が嘘つくとしたら黙っちゃうかな。自分の考えを正直に喋れないから口数が減る。そういう意味ではあまり自分の意見を述べてない天峰も微妙かもしれない。場をまとめようとはしてるけ

ど目立つ意見言っていないよね」

「天峰は素直に喋ってた印象だけだなあ。個人的な印象では、一番気になったのは久遠坂。隙がない感じで」

「全然絞り込めないじゃないですか」

雄大はお手上げと両手を上げた。

疑いはじめると誰もが怪しく見えてきてしまうものだ。

「死神の反応もまだありませんね」

ノートパソコンを操作し、雄大が死神のプロフィールページを呼び出す。討議を通して何か思うところがあれば、死神の書き込みにも現れるんじゃないかというのが二人の読みだった。殺人予告が単なる悪ノリで書かれたものならば、今頃消そうとしているかもしれない。

「そういえばタカちゃん、調べられないの？ 死神の正体」

エンジニアの雄大は、私より遥かにパソコンの技術に詳しい。私が言うと、雄大は目を瞬いた。「調べるって、どうやって」

「だって、警察は殺人予告を書き込んだ人間を特定できるんじゃないよ？ ニュースとかでよくやってるじゃん。警察ができるなら、タカちゃんだってできるんじゃない？ ハッキング？ すると

かさ」

「早紀さん、毎日利用してるくせにネットのこと知りませんね。警察がハッキングで捜査するわけじゃないでしょ」

「じゃあ、どうやって捜査するの？」

「逆に質問ですけど、たとえば早紀さんがネットで読み書きしているデータって、何処から来ていると思ってますか」

「何処から来ている……？」

雄大はノートパソコンを手で示した。

「たとえば僕が誰かのブログを表示させる瞬間、このパソコンはそのブログのデータを、回線を通じて取りに行ってます。取りに行く先は、ブログのデータを持っている、一台のとあるコンピュータ。何処にあるかはわかりません。北海道か沖縄か世界の裏側か。僕がアクセスした瞬間、何処かに設置されたそのコンピュータが、かたかたっディスクを動かして、応答してくれているわけですね。このコンピュータをWEBサーバと言ったりします。大切なのは、それが魔法でできているんじゃないくて、物理媒体だということですよ」

『ネットに書き込んで』と考えるから、漠然としすぎてわからなくなるんです、と雄大は言

った。

「みんな『ネット』なんて壮大で曖昧なものを触ってるわけじゃない。『WEBサーバ』という一台のコンピュータに対して書き込んでいる。それを理解してないから、空に向かって叫ぶような感覚で殺人予告しちゃう。物理的な実体を書き込みしてるんだから、それが証拠として残るに決まってるでしょ。」

なるほど、と思った。

警察は、ネットというよくわからないものを、魔法のようなハッキングなるもので捜査するわけではない。WEBサーバという物体を調べるわけなのだ。

「WEBサーバは管理会社のデータセンタに設置してあったり、個人が所有して運営している場合もあります。」

「個人で？」

「ええ。ある程度技術に明るければ難しくありませんよ。無料のレンタルサービスが沢山あるので、やる人は多くありませんけど。」

なんとも難しい世界だ。

「警察がネット犯罪の捜査をする場合、まず該当するWEBサーバの管理者に連絡をとって、調べさせてくれと請求するわけです。」

「うん。」

「WEBサーバの何を見るかというと、WEBサーバは、アクセスされたとき、いま誰それに読み取られたぞという記録《ログ》を保存しているんですね。そのログを見ます。犯行現場に残された、痕跡というわけです。」

「指紋みたいなもの？」

「そうです。付けられた正確な日時のわかる指紋。IPアドレスとも言います。」

WEBサーバを一つの部屋だとすると、その部屋の中に犯人が残した指紋が、必ずログとして残る。

「警察はこれを探取します。あとはひたすら地道な作業です。現場から犯人の家までの道すがらには、同じ指紋がべたべたと付いているので、それを辿っていつて書き込んだパソコンを特定します。隠す技術もないではないですが、完全に消し去るのは難しいですね。」

なるほど、確かに警察は魔法で特定するのではない。ネットの犯罪捜査も、現実の犯罪捜査と同じように、地道な作業の積み重ねなのだ。

「まとめると、警察はWEBサーバから探取した指紋を使って捜査をする。逆に指紋にあたる口

グがなければ、警察も犯人を特定できないってことです」

「ログが手に入れば、タカちゃんでも犯人を特定できる？」

「サーバ管理者は警察以外にログを開示なんてしませんけどね。警察と同じ権限が貰えれば、僕でも特定できますよ」

「相手が凄いいハッカーでも？」

「殺人予告なんて低俗なことする奴に、ハッカーなんていませんよ」

まるでハッカーを擁護するような口ぶりだ。

私がそう言うのと、雄大は首を振った。

「擁護も何も、そもそもハッカーは一流のコンピュータ技術を持つ人間を指す尊称です。技術を悪用するのはクラッカーと呼ばれます。マイクロソフトのビル・ゲイツも、アップルのスティーブ・ジョブズも、グーグルのラリー・ページも、ハッカーと言えます。子供の頃から知的好奇心に溢れ、何か新しいことをやりたがった。ソフトウェアの世界を牽引するのは、常にそうしたハッカーたちです。凡人が百人集まるより、天才的なハッカー一人の思想が革新をもたらすのがソフトの世界です。まあ、得てして他人に理解されずに苦勞する人が多いですけどね。新しいものの創造は既存の破壊と同義だったりしますから」

熱っぽい口調だった。技術者の雄大にとって、そうしたハッカーは憧れの存在なのかもしれない。

「彼らは技術の高みを登るのに純粹です。それを悪用して利益を得ようとか、俗っぽい価値観は彼らにはない。セキュリティホールを突破するようなハッカーもたまにいますが、高い山があるから登ってみようというような感覚ですね。彼らを動かすのは知的好奇心。どういう仕組みで動くのか、ということへの興味。純粹なんですよ」

熱っぽく語っていた雄大が、ふと、我を取り戻したように恥ずかしそうな顔をした。誤魔化すようにマウスに手をかけた。

「さて、更新されてるかな」

どれだけ想いを語っても、雄大も私もそんな天才ではない。組織の中で集まって、天才の一呼吸に及ばないとわかっていながら、それでも少しでも良い方向へ進むようにと、毎日をもがいているだけのただの凡人だ。天才は憧れの中だけの存在でいい。

雄大がサイトを更新した。マウスをクリックしたその一瞬で、どこか遠くに置かれた機械がカタカタ動いて応答しているなんて、私には実感が湧かない。

「どう？ 更新されてる？」

「……………」

雄大は返事をしなかった。

しばらく画面を見やっていたが、やがてノートパソコンをテーブルの上でぐるりと反転させると、こちらへ押しやった。

【投稿者：奏でる死神 星シテズ

ジグ、ジグ、ジグ 面接官の前 互いに互いを窺いながら

骸骨たちが鳴らす骨は茶番の調べ ジグ、ジグ、ジグ

生者のふりをする骸骨たちには 鼓動を打つ心臓は無い 髑髏に輝く眼球も無い
薄暗く湿った墓場に戻って 踊る踊りを楽しみにしている】

【投稿者：奏でる死神 陸 商

ジグ、ジグ、ジグ 分厚い人体解剖図を広げた生者の前で

骸骨たちが鳴らす骨は不服の調べ ジグ、ジグ、ジグ

体を擦らせ 踊る骸骨ども 骨がかちゃかちゃと擦れ合う音

誰もが手をつなぎ 輪になって踊りながら 人事の 橋 子を殺害する

ジグ、ジグ、ジグ とっておきの髑髏を差し出しているのに

ジグ、ジグ、ジグ 載っている顔と違つと言つばかりだったから】

いったい何考えてるんだ

電話の向こうで、彼は憤慨した声を出した。僕はパソコンのモニターを見やった。

書き込み、見たのか

ああ。見たよ。どうしちゃったんだ

いつ見たんだ

僕は部屋の壁掛け時計をみやった。彼は無視した。

なんでこんなことするんだ。悪ふざけにしても度が過ぎるぞ

彼は本気で怒っている。その怒りを心地よく感じた。

勝負をするときは真剣勝負　子供の頃からの二人の取り決めだ。

たれこんでみるよ

……どういう意味だよ

面接官に言ってやれよ。殺人予告を書いているのは僕だってことをさ。今日のあのGD《グルー

ブディスカッション》のテーマ、傑作だったじゃないか。人事、絶対見てるぜ。この書き込み

僕はとんとんと指先でモニタを叩いた。

たれこんじゃえば、僕の負けかもよ？

ハンデでもくれてるつもりなのか？

ハンデ？　まさか。僕はきみと勝負したいだけだ。どっちの信念が勝ち残るのか。面接しても

らいたくてうずうずしてる

きみは頭がいい。良すぎて時々ついていけない

彼は吐息をついた。

何を考えてる？　社会への当てつけのつもりか？　殺人予告をするような奴を、見抜けずに内

定を出すのかって

さてね

きみが単なる憂さ晴らしでこんなことするとは思えない。何故こんなことするんだ

ふふん。なぜやったか《ホワイダニット》ばかりだな。良くない。動機なんて犯人にとっては、

嘘をついてなんぼのもんだ。そんなこともわからないのかい？

ふざけてるのか

僕は笑った。彼は黙った。

……僕はきみを友達だと思ってる
低い声で彼は続けた。

たとえ意見が食い違うことがあっても、いつも最後にはわかりあえてきた
ああ。今回もわかりあえると思う

これ以上続けるなら、黙っているわけにはいかない。警告しておく。次はないからな
宣戦布告だな。いいぜ

僕は携帯を切った。マウスを手に取り、ファイルを一つ開く。もう一度時計を確認してから、
ホイールを回してエディタをスクロールさせた。

「まずお名前をお聞かせください」

「久遠坂和之です」

「天峰省吾です」

二つ並んだ椅子に着席した彼らは、やや硬い声で答えた。

【七星システムズ一次通過。】

死神のプロフィールページはそう更新されていた。

私は二人の目をじっと見つめた。

二人のうちどちらかは、ブルーディスプレイを嘲り、殺人予告を書いた当人なのだ。傍
目には二人とも緊張しているように見える。実際は、一人はそう振舞っているだけで、内心面接
を馬鹿にしきっている。

一次面接のあと、本社から返ってきた返答は、やはり通報を禁じるものだった。通報元が七星と知れた場合のリスクが大きいという結論だった。風評被害への過剰反応だ。

私は苛立ちを感じる。思う壺ではないか。真面目に生きている人間がやっていることを省みようとせずに、匿名を盾にして好き放題やっている人間たちの。

どちらが死神なのか、この面接で見極めなければならぬ。表で人間を演じておきながら、裏で殺人予告を書く。そんな人間性は認められない。

「学生時代に力を入れていたことがありません。お聞かせください。久遠坂さんから」

面接官の一人がそう言うと、久遠坂はプログラミングやサーバ構築の経験を語った。

「自作のPCでサーバを構築し、ウェブサイトの構築代行などをしていました」

久遠坂の検索では、ヴァイオリンコンクールのページを発見していた。コンクールで優勝したときの、地方のニュース記事が引っかけたのだ。芸術家肌かと思ったのだが、技術もできるらしい。

扱っていた知人のデータを壊してしまい叱られたこと、それを踏まえてどう行動すればいいか考え実践し、結果が改善したことなど、淀みなく喋る。

話の組み立て方など論理的思考力は高い。一般的な成長ストーリーに落としこんでいるので門外漢にも理解しやすく、そこに専門性のアピールがスパイスとしてまぶされ、いやらしさがない。

質問した面接官が話を掘り下げたが、久遠坂が暗に提示した掘り下げポイントをなぞるだけだった。人事部の面接官は、面接シートの評価項目の所見を埋めなければならない。一人分のシートを埋めるのに時間は割けず、自然、評価項目に沿った話を引き出すようになるがちだ。その習性を久遠坂はうまく利用し、用意していた答えを手渡している。就活慣れしていると感じた。

……嘘をつかれても、わからないかもしれない。

「それでは次に、天峰さん。学生時代に力を入れていたことをお聞かせください」

「ボランティアサークルで、老人ホームの慰問などの活動をしていました」

天峰章吾の検索では何も引っかけなかった。そのサークルはウェブサイトを持っていないか、メンバーを記載していないのだろうか。

「活動の中で得たこと、成長した点などを教えてください」

「人の喜んでくれる顔を見るのが好きでやっていました。活動の中で自分が成長したかどうかは、

正直自分ではわかりません」

勘違いしている学生が多いが、ただボランティアサークルをやっていたというだけではアピールにならない。そこから何を学びとったか、どう成長したかが重要なのだ。

面接官が困ったように頬を掻いた。「活動の中で特に得た」とはありませんでしたか」

「あえて言うなら、ホームを訪問したときにみなさんが喜んでくれた笑顔です。ボランティアです、特に何かを得たいと思ってやっていたわけではありませんでした」

「では何を目的として活動していらしたんでしょうか？」

「周りの人に、少しでも喜んでもらえればと思って活動していました」

「その目標に対する結果は、どのようなものになりましたか？」

「結果、ですか」

「つまり天峰さんはサークル活動を行うことで、多くの方に喜んでもらいたいという目標を設定したわけなんですよ？」

「ええ。はい」

「ですのでその目標に対する成果を伺いたいのです」

「成果、ですか」

「そうです。いくつ老人ホームを回ったとか、何回訪問したとか、何人に介護をしたとか、その結果満足度が何パーセント向上したとか、そういった具体的な数字があれば、天峰さんがどれだけ成果を出すことができたか、聞く方もわかりやすくなりますよね」

「顔や名前は記憶していますが、数字にしていくつかという観点で考えたことはありませんでした」

「今度からは記録しておくといいと思いますよ。その数字を上げようと思えば、モチベーションも上がりますよね」

「そうですね。ただ、数字も大切だとは思いますが、一人一人の顔を見て、喜んでもらいたいという気持ちが強いです」

「あるいは何処かで表彰されたとかがあると良いですね」

「そうしたものはお断りしていました」

「活動の結果どういう言葉を貰うことができたか、といったものでも結構です。どういう言葉を貰い、それについて何を感じたか。どう成長したか。そうしたエピソードはありませんか」

「言葉は沢山かけて頂けましたが、それを成果と言ってしまった方がいいのは自分にはわかりません」

面接官は首を捻り、『活動の中で得たこと』の欄に『笑顔』、『活動の中で成長したこと』、『活動の成果』の欄に『特になし』と記入した。

「お二人は同じ大学なんですね」

一段落したところで座をほぐすために水を向けると、二人は顔を見合わせた。

二人とも東征大学生。志望する職種も同じで、配属されれば寺田の下になる。このチームの選考内定のうち寺田の担当部署には一名の割り当てだ。どちらかは落とすことになる。

「ええ、まあ……」

久遠坂が微笑した。

ちよっと迷ってから、付け加えた。「というか、実は友達です」

「ええ。友達です」

天峰が頷いた。

「たまに意見がすれ違うこともありますが最後にはわかりあえる。そういう仲だと思っています」

「それは素晴らしいですね」

こういうことはたまにある。同じ大学、学部だったりすると、希望する職種も大差がない。友人同士で就活の情報交換をしていると、同じ企業に目が向くことも多い。友達の方は殺人予告に

ついて、知っているのだろうか。

頃合いだ。

「参考までに伺いたいのですが、今までどのような所を受けて来られたんでしょうか？」

私が訊くと、二人はすっと身構えた。

「今後の採用活動の参考にしたいと思ひまして。今までに受けた会社の選考で、この会社の選考は嫌だったなと思うものがあれば、教えて頂けたらありがたいのですが」

二人の動揺は自然な反応だ。学生は他社の話題を喋りたがらない。しかもネガティブなことを語れと言われて、素直に批判などできるわけがない。かわし方を見たい。

天峰は、ある会社の面接で、面接官に話が通じなかったのが辛かったが、自分の伝え方も悪かったと思うと話した。

「みなさんそれぞれの立場があり、いろいろな考えで物事を見ておられますから。伝わらなければ、それは自分の責任だと思います。うまく伝わるよう努力したいです」

考え考え喋っているが、話題からして特に不自然ではない。話も抽象的ではあるが自分の思うことを素直に喋っているように感じる。

「よろしければ、企業名など教えていただけませんかでしょうか」

「いえ、それについては申し訳ありませんが。あちらの面接官の方に失礼ですから」
私はじつと天峰の目を見た。

天峰は目を反らさなかった。自然な態度に見えた。

「私は二社あります」

天峰とは逆に、久遠坂はざつくばらん口調で言った。

「一社では、面接官の方とのジエネレーションギャップが強かったです。バブルの価値観が強くて、現代では違うのにな、と不満が残りました。溝が埋め切れませんでした」

「会社名はお教え頂けますか？」

「株式会社ソルテット様です」

私はふっ、と息を吸い込んだ。

ソルテット。ソルテット。

尻尾を掴んだ。

「……ありがとうございます」

「もう一社の方は、技術者の採用募集なのに、関連のないことばかり言及されるのが不満でした。型通りの質疑に終始してしまい、中身に関して見て貰えていない物足りなさを感じました」

続ける久遠坂の目の奥が 笑っているように感じた。

「こちらは陸瀬商事様です」

違う。

尻尾を掴んだのではない。挑戦してきているのだ。

「なので型通りでない質問を頂けると、きちんと学生を見ようとしてくださっているんだと感じます。応えて正直に答えさせて頂きました。ありがとうございます」

久遠坂はぺこりと頭を下げた。

パソコンに予告を打ち込み、送信する。

しばらくして、携帯電話が鳴った。おかしくなった。きちんとチェックしてるんじゃないか。通話ボタンを押した。

次はないって言ったはずだぞ

彼の低い声が響いた。

見たのか

ああ、見たよ

いま見たのか

僕は部屋の壁掛け時計をみやった。彼は無視した。

自分のやってることがわかってるのか。幼稚だぜ。いい加減にしろよ

結局、たれこまなかったじゃないか。言えば良かったのに。せつかく隣にいたんだから無茶言うな。きみは

たれこめよ

マウスを手に取り、ファイルを一つ開く。エディタをスクロールさせながら、僕は付け加えた。今回は、実行するぜ

……本気で言ってるのか？

もちろん。熱中すると周りが見えなくなる。僕の性格はよく知っているだろう。僕はきみと

勝負がしたい。そのためには他のことなんてどうでも良くなっている

脅しか？ これは

裁定してもらおうぜ。あの人事は正しい選択をできるかな？ もう一誰がやったか《フーダニ

ット》じゃない。どちらがやったか《フィッチダニット》だ。まさか間違えないだろう？

……

社会に人を見る目はあるか。自分の生き方に自信はあるか？

僕は笑う。彼は黙っている。

はなから面接などどうでもいいのだ。企業も社会も興味ない。

これはただ彼と僕の信念の話。

勝負だ

久遠坂と、「奏でる死神」をつなぐ線は、ヴァイオリンコンクールのページにあった。

久遠坂がコンクールで弾いた曲は、サン・サーンズの『死の舞踏』。同名の詩をもとに作曲されたもので、詩の内容は、夜中に墓場で死神がヴァイオリンを弾き、それに合わせて骸骨たちが踊りを踊るというグロテスクなものだった。殺人予告のジグジグジグという妙なフレーズは、この詩から拝借されたものだ。

彼は、はじめから挑戦してきていたのではないか　そう思った。

思えば私が殺人予告を発見したのも、書き込みへのリンクが七星の情報交換スレッドへ貼りつけてあったからだ。人事が見つけやすいように、わざわざそんなことをしたのではないか。

世の中に対する、暗い敵対心。

フロアの間人が出払ったタイミングを見計らって、私は調べておいた陸瀬商事の連絡先をコピーした。

その書き込みのことは既に存じています

電話の相手は豊橋敦子と名乗った。

私も、就活サイトの自社関連のスレッドは目を通してますから。リンクが貼りつけられていて、見てみたらあんな書き込みがありますでしょう。びっくりして、すぐに通報してしまいましたよ。警察は早期の捜査を約束してくれたという。

私は胸を撫で下ろした。既に警察が動いてくれているのだ。

私にはよくわからないのですが、ウェブサイトのサーバを管理しているところに、情報開示の依頼をするとのことでした

裏クチコミサイトでは過去にも逮捕者が出ている。管理人が警察の捜査に協力したということだ。今度も開示を拒みはしないだろう。

正直な話、久遠坂という学生がそんなタイプだとは思いませんでしたが。評価が高くて、面接も合格を出しているんです

殺人予告をするほどの何が気に触ったのか、と豊橋は鼻息を漏らした。

面接は毎日のことですし学生の人数も多いです。ちっとも下調べしてない学生も多いし、流れ作業になりがちな面があることは確かです。でもこちらにも色々と事情があります

「わかります」

相手の事情も考えずに人を好き勝手に言っているのを見てみると、腹立たしくなりますよ。おまえらは何様だって。自分たちが何か偉いとも思っているのかって

「わかります」

嫌な時代ですね

それは適切な表現かもしれないと、ふと思った。嫌な学生でも嫌な会社でもない。嫌な時代。私、ときどき思っんですよ。最初に見捨てたのはどちらなんだろうって

豊橋が吐息をつくのが聞こえた。

私の若い頃は、世の中は自分を受け入れてくれるんだって、疑ったことなんてありませんでした。正直に自分の気持ちのまま生きていけば、誰かがわかってくれるって安心感があった。けれど近頃の若い子は、社会が自分自身を欲しているわけではないことを、最初からわかっているんですよね

私には面接室で豊橋の前に座る、折り目の正しいスーツに身を包み、物分り良く振舞う顔のない彼らの姿が見える気がした。彼らは皆、骸骨だった。生者のふりをしなければならぬと思っ

ている骸骨。

面接をしていて、彼らはもう世の中を見捨ててしまったんだなあ、と思うことがあります。社会に対して、何も期待をしていない。社会が若者を見捨てたのか、若者が社会を見捨てたのか。どちらが先なのかはわかりません。でもいつの間にかすっかり距離が空いてしまった。そんな感じがしますよ

私たちは人を見ている。ひとりひとり。データではない。そこにいる人間をみようとしている。死神は、一体豊橋の何を見て、あんな書き込みをする気になったのだろう。相手の本質を見通さずに、表面だけを見て判断しているのは、人事ではない。死神の方だ。

豊橋がふっと吐息をついた。それで彼女の下に現実が戻るのがわかった。

警察が動いている以上、じきに捕まると思います。それまではお互い、用心することにしな

よう。特にあなたは注意なさってね

はい、と思わず言ってから、首を傾げた。

お互い、とはどういうことだ？

彼女は殺害すると書かれたから用心せねばならない。

でも私は

ひょっとして、まだ見ていませんか？ つい三十分ほど前の投稿です

私は携帯を握り締めたまま、机の上に広げたノートパソコンを見やった。

おそろおそろ面接評価裏クチコミサイトを開いた。七星システムズのページを開いた。画面が切り替わった。

【投稿者：奏でる死神 七星システムズ
見てるかな？ 七星システムズの人事。】

弾かれるようにモニタから身を離れた。

書き込みの文章が意思を持ってモニタの向こうから手を伸ばしてくるのではないかという、馬鹿らしい錯覚が頭を過ぎった。

【ずっと前から気付いてたんだよ。あんなグループディスカッションやらされたら当たり前だよ。人を見定めてばかりいる人は、自分が見定められることに無頓着になるね。

人事が気付いていることはわかってたけど、今日の面接であなただと確信した。あの質問はユニークだったね。俺の正体を知りたかったの？ 教えたよ。通じた？ 通報していいよ。無駄だけど。警察なんかは俺を捕まえない。あなたの手でなければ】

一瞬の間に色々な感覚が、胸の中に散らばった。それはかくれんぼで見つかったときに似ていた。隠れて鬼を見張っていたのに、壁から少しでも姿を出した途端、一直線にこちらへ駆けてくる。

【死の舞踏。骸骨たちは踊る。フランスの詩人アンリ・カザリスによって書かれたこの詩は、あらゆる種の社会主義的理想郷を描いた曲なんだ。

死はすべての人間に平等に降り注ぐ。死者には貧乏人も金持ちもない。貴族も奴隷も区別がない。すべての人間が骨となった等しい姿になって、分け隔てなくただ踊り狂う。

通底しているのは個を喪失した先にある平等性だ。この詩が本当に謳っているのは死じゃない、その先にある平等についてなんだよ。持たざる者たちの仮りそののユートピア。みんな骨なのに楽しそうだよ。

でもひとたび生者が混じったら、骸骨たちはこんな感じになっちゃう。

てめえらがこんな社会にしたんだろうが。好き勝手言ってくれやがってよ。

何か勘違いしてんじゃねえか。自分たちが何か偉いんでも思ってるのかよ。
おまえらのくだらない茶番に振り回される身になってみる！

ってね。ただのコピペだけど。怖いよね】

自分たちが何か偉いんでも思っているのか 死神は豊橋とまったく同じことを言っている。
どちらも同じことを思っていたのだ。

会社の陰に隠れていた私たち。

だから彼らは、自分が隠られる番になると、仕返しするのか。

【ジグ、ジグ、ジグ 墓場で向かい合った二人の骸骨

骸骨たちが鳴らす骨は切実の調べ ジグ、ジグ、ジグ、ジグ
暁を告げる鶏の鳴き声 不意に彼らは踊りをやめる
骸骨たちは想いを胸に 最後の審判のもとへと向かう

ジグ、ジグ、ジグ 一人は正直な人間の骸骨

ジグ、ジグ、ジグ 一人は嘘つきな死神の骸骨

死神はヴァイオリンを鎌へ持ち替え

横上早紀を殺害する

ああ、この哀れな世にしてなんてすばらしき夜
死と平等に祝福あれ！】

玄関のチャイムが鳴った。

僕はインタフォンのボタンを押した。

鋭い目をした二人組の男が、モニタ越しに手帳を差し出した。

警視庁です。面接評価裏クチコミサイトの殺人予告の件についてお話があります。お時間よろしいでしょうか？

早紀さん、今何処にいますか？

事情を告げると、雄大は受話器の向こうから嘔みつきそつな声を出した。

「まだ会社」

周りに人は？

言われてはじめて、フロアに誰も残っていないことに気付いた。

自宅に帰った方がいいと思います。もう少ししたらそつちまで行きますから、一緒に帰りましょう

「殺人予告なんて、ほとんどは実害ないって言ったじゃない」

でも、万一ということもありますから

私の不安に気づいたのか、雄大は声のトーンを落とした。

念のためです。奴も悪ノリしているだけだとは思いますが。警察が動いているならすぐに捕まります。ただ、それまでは気をつけて

私を安心させるのが自分の職務だというように、付け加えた。大丈夫ですから殺人予告なんかより、その一言の方が強かった。ありがとって私は電話を切った。パソコンを見やると、モニタにはまだ書き込みが表示されていた。

恐怖心は薄らいで、代わりに悔しさがこみあげてきた。

メール作成画面を開くと、久遠坂のアドレスを打ち込んだ。不合格用の文章をコピーし、本文に貼り付けて編集した。

【久遠坂和之様。今回は弊社の入社面接をお受け頂き、まことにありがとうございます。慎重に討議を重ねました結果、今回は、久遠坂様のご希望に添えかねる結果となりましたことをお知らせ致します。】

追伸、と続け、キーを打ち込む。

【面接評価裏クチコミサイトでの書き込みを拝見致しました。通報も済んでおりますので、まもなく久遠坂様のもとへ警察が伺われるかと思えます。

今後の久遠坂様の益々のご活躍をお祈りしております。】

少し躊躇したが、叩くようにマウスをクリックした。瞬く間に送信が完了する。

警察が動いているとわかれば、滅多な行動にも出ないだろう。あとは警察がなんとかしてくれる。

もう、どんなことを書きこまれようが構わない。見たくもない。

ブラウザを閉じようと手を伸ばした。

と、デスクががたがたと鳴りはじめた。

私はマウスに手を伸ばしたまま、机の上で震えるPHSをみつめた。

液晶画面に「外線」という文字と番号が表示されている。会社支給のPHS番号は、問い合わせ対応用として受験者に公開していた。

いやな予感がした。

デスクの上に、履歴書を閉じたファイルが置いてある。一番上から久遠坂の履歴書を取り出し、携帯番号の欄を確認した。それからもう一度、PHSの液晶に目をやった。

久遠坂の番号だ。

鳴るままに放置しておく、やがて止まった。

しばらく、液晶をみつめたままPHSを握り締めていた。

と、パソコンのスピーカーが、ピコン、と電子音を発した。

モニタにポップアップが上がっている。新着メールだ。

差出人は【久遠坂和之】。

ひたひたと何かが歩み寄る足音を聞いた気がした。

またPHSが震えはじめた。久遠坂の番号だ。

自分で自分の身体を抱くと鳥肌が立っているのがわかった。PHSに手を伸ばす。着信ボタンにかけた指を押し込む勇気が湧かない。

負けてたまるか。こんな奴に、世の中を舐められたまままでいてたまるか。

思い切って押しこんだ。

「失礼します」

帰り支度をしていると、声とともにドアが開いた。

振り返ると、面接のときと同じスーツ姿が立っていた。並んだ無人のデスクを見渡す。

「お忙しいところすみません。おひとりですか？」

私は頷いた。

「横上さんに話したいことがあったので伺いました。他の方の耳に入れなくなかったので、失礼ですがお一人になれるまで待たせて頂きました」

「話したいこと？」

「面接評価裏クチコミサイトの書き込み、見ておられますよね？」

「ええ。殺人予告の件ですね。見ています。私への予告も拝見しました」

私は正面から彼をみつめた。

「書き込んだ人物が誰かも、わかりました」

「どうされるおつもりですか」

「既に警察に通報しました。他に予告を受けた方が何人もいましたし、悪質だということで、早

急に犯人逮捕にあたってくれるそうです。今ごろ特定を終えて、犯人の自宅に向かっていること
と思います」

「……そうですか」
彼はうつむいた。

「あいつが何を考えているのか、僕にもわかりません。ただこうやって人に迷惑をかけている以
上、それで仕方ないと思います……」

「そういうのはもう結構です」
彼は目を瞬いた。

「私が通報したのは、あなたです」

「僕を？ どうして？」

ふと、彼は私のPCのモニタを見やった。

モニタにはメールが表示されたままだ。

【件名： Re:選考結果

久遠坂和之です。選考結果のメールを読んだのですが、追伸以下に書かれている内容を見て、

誤解されていると思い連絡しました。

裏クチコミサイトにある書き込みは、僕が書いたものではありません。】

メールを目で追う表情を私は見ている。

【選考結果については残念ですが、仕方ないと思って納得しています。僕が自分の考えを話した
結果のことなので、悔いはありません。

でも落とされる原因が、僕自身ではなくてこの書き込みなのだったら、納得いきません。な
んのために話をしたのかわからない。僕自身の言葉を聞いてほしいんです。】

「危うく、あなたの畏に引っ掛かるところでした」

棒立ちになって突っ立っている天峰章吾の背中に、私は声をかけた。

「確かに予告の内容は、久遠坂くんの体験に当てはまるものだった。ソルテットと陸瀬商事を受
けたのも、コンクールで死の舞踏を演奏したのも久遠坂くんだった。でも書いたのはあなたです」
すべては天峰が仕掛けた畏だったのだ。

「なぜやったのか　殺人予告の意図を考えてみれば、簡単なことでした」
私は続けた。

「久遠坂くんには動機がないんです。彼が陸瀬商事の面接に合格していると聞いたときに気付くべきでした。不合格ならばともかく、合格を受けて殺人予告を書くななんて不自然です。殺人予告は、選考に落ちた憂さを晴らすためのものではない。そもそもあんな詩まで使ったものを、直情的な動機によって為されていると考えることが間違いだったんです」

殺人予告は、別の意図を持って書かれたものだった。

「それを読んだ人間に、書いた者への悪印象を植えつけるために、書き込まれたものだったんです」

次々と殺人予告をする奴がいる。その予告相手はすべて、久遠坂和之が受けた会社の人事だ。そんな情報を人事に与えて、得をするのは一体誰なのか。

同じ大学で同じ職種を同じチームに受ける、ライバルの受験者だ。枠は一つしかなかったのだから。

「あなたは人事に久遠坂くんへの悪印象を植えつけるために、彼を装い、面接評価サイトへ殺人予告を書き込んだ。そして、各社の就活関係の情報交換スレッドへ書き込みへのリンクを貼り付

け、人事を呼び寄せた」

天峰と久遠坂は友人だ。就活の情報交換をしていたらう。久遠坂がどんな会社を受けたのか、その結果や内容も、天峰は把握していた。それを利用したのだ。

天峰は久遠坂から聞き出した就活スケジュールを、死神の個人プロフィールに書き込んでおいた。スケジュールを見た人事は、自社を受ける人間だとわかれば、当然落とそうとするだろう。

ネットで昔の記録を辿るかもしれない。面接で会社名を聞き出すかもしれない。人事がどんなに頑張っても、久遠坂がどんなに正直に喋っても、殺人予告は自動的に久遠坂に結びついていく仕掛け。

本当の動機は、ライバル減らしなどではないのかもしれない。

本当の動機は、ただ近しい友人を、近しいからこそ認められないその考えの違いを、自分にはどうしても持つことのできない信念そのものを、徹底的に潰そうという暗く強い意思なのではないか。

死神は生者が羨ましいから骸骨を踊らせる。

「私は、正直な言葉には力があると思っています」

本当の言葉は心に届く。幾百もの嘘の言葉より雄弁に。

「あなたも本当は、そのことをわかっていたんじゃないですか？」
天峰は答えない。

「久遠坂くんの訴えを聞いて、私はやっと自分が利用されていたことに気がきました。私はあなたの演奏で踊ったりしません。私だけじゃない。みんな踊りません。みんな骸骨ではないのです」

「
天峰が口の中だけで何かを呟いた。
勝負だ、と言ったようだった。

「信じてください」

天峰は私の目を見つめた。

「僕は書いてない。書いたのは久遠坂だ」

天峰が一步こちらへと踏み出した。私は反射的に後ろへ下がった。天峰は立ち止まった。

「本人から直接、そう聞いたんです」

「……本人から？」

「久遠坂から裏クチコミサイトのアドレスを教えてもらったのは二週間ほど前です。ここで殺人

予告をするって言うてきた」

私は質問する。

「おかしいと思わなかったんですか？」

「もちろん理由を訊きました。久遠坂は笑って言いました。理由なんて訊いてどうするんだ。

大事なのは何故かじゃない。誰かでも、何かでも、いつかでも、どうやってかでもないって」

「意味がわからないですね」

「人をはぐらかすのが多い奴です。頭が良すぎて、考えてることをいちいち他人に説明するのが面倒くさいんだと思う。いつものことなので、放っておきました。何か考えがあるのかと思ったから。でも書き込みはエスカレートするだけだった」

私への殺人予告を見て、もう我慢ができなくなった。それが天峰の主張だった。

「信じてください。嘘をついているのはあいつだ。僕は嘘なんてついてない」

天峰章吾の言葉と表情は、真に迫っていた。私は自分の中で、久遠坂に触れかけていた針が、また揺れ始めるのを感じた。

「動機を教えてください」

志望動機を訊くように、私は天峰にそう問い掛ける。人事の基本の問い。

結局、ここに立ち返るのだ。

「久遠坂くんが殺人予告を書いたなら、その動機を教えてください」

「それは……」

「陸瀬商事の面接に合格している久遠坂くんが、豊橋敦子に殺人予告を書く動機。自分が犯人であることを隠しもせず、むしろ通報してくれと言わんばかりの内容で、私に殺人予告を書く動機。それを教えてください」

天峰の目をみつめる。動揺が感じられた。

理由なんて訊いてどうするんだ、大事なのは何故かじゃない。

そんなのは詭弁だ。

動機があるはずだ。実利的なものでも、感情的なものでも。

そうでなければ人はわかりあうこともできない。

「わかりません……。慌てるあなたたちを見て愉しんでいた、とか」

「一つ確認させてください」

その瞳の中の良心を、面接の席での二人の言葉を信じた。

この質問に平然と切り返すことができるなら、私は彼の嘘を見抜くことなどできない。

「あなたは、あなたの友達が、そういう人間であると思っている。そうですか？」

天峰がはっと息を呑んだ。

そのとき、PHSが鳴り始めた。

警察です。殺人予告の件になります。裏クチコミサイトのサーバのログを解析した結果、無事書き込んだ人物の身元が割れました。あなたの言ったとおりの人物でした

私は天峰に聞こえるようにPHSを掲げた。

天峰章吾という人物です。自宅に向かいましたがいらないようなので、横上さんの身の安全を考慮してご連絡さしあげました。なるべく人の多いところへいらしてください

天峰の足から力が抜け、椅子にへたりこんだ。

「警察を舐めすぎましたね。どうせ動かないと思っていたのですが、きちんと捜査をしてくれませんでした」

天峰は顔をあげた。「僕は嘘なんてついてない……」

私はもうかける言葉を持たなかった。正直であることに絶望した天峰は、嘘を吐き続けていればそれで救われるのだと思いつ込んだのだ。

世の中はそれほど酷くない。どこにも骸骨などいやしない。奏で続けるうちに周りが見えなく

なった哀れな死神に、私は丁寧に一礼した。

「今後の天峰様の益々のご活躍をお祈りしております」

部屋の入り口のドアが開け放たれると、踏み込んできた二人組みの男が、へたりこんだ天峰に警察手帳を見せて身体を抑えた。天峰は目を白黒させ、何か喚いたが、男が一喝するとすぐに大人しくなった。

気配を感じて振り返ると、フロアの隅に立っている姿に見覚えがあった。

久遠坂和之だ。事情を知って駆けつけたらしい。目の前の状況を呑み込みきれないのか、複雑な表情をしている。

「久遠坂」

警察に引き立てられ、脇を通るとき、天峰が久遠坂に気付いた。

その顔が泣きそうに歪む。陥れようとした友達に、それでも縋るように声をかける彼の姿は、酷く哀れに見えた。

「久遠坂。僕は」

久遠坂は一瞬だけ、つられて哀れそうな顔をした。

振り払うように天峰を見据えた。

「言っただろ。次はないって」

久遠坂に睨みつけられ、天峰は立ち竦む。

「久遠坂……」

「天峰。きみは僕の友達だ。きみは優秀だ。それに最高にいいやつだ。いいやつすぎて、世の中に絶望してしまったことも知ってた。でも僕は、きみは立ち直ると信じてた。僕だって、握りしめた拳が震える。」

「僕だって正直に生きてきて、いっぱい馬鹿をみたよ。嘘をついて生きればいいやと思ったことだって、沢山あったさ。でもそんな風に生きても虚しいだけだと思ったから、正直なままでどう生きていけるか考えて努力している。きみはなんだよ。いいか天峰、僕は、きみが僕を陥れようとしたことを怒ってるんじゃない。自分を信じて努力することを、そんな簡単なことを、どうしてきみほどの奴がやれなかったのか、それが悔しくて怒ってるんだ」

「……………」

「おまえだって、ほんとに嘘を見抜いてほしかったんだろ」

久遠坂が天峰の目を見て、穏やかに笑った。「これが結果だぜ」

「……ああ」

つられて一瞬だけ、天峰が苦笑めいた表情を浮かべた。

「そうだな」

世の中を信じきれなかった自分の小ささに、恥じ入るような笑みだった。

そつだ。あなたたちはまだ若い。社会を見限るのは早い。こんなにも自分を信頼してくれている友達もいるじゃないか。

天峰のまなじりから涙がこぼれた。

大粒の涙が、ぼろぼろと床を濡らした。

結末

「申し訳ありませんでした！」

やりなおし面接は、謝罪から始まった。

本社の指示は、今回の件について学生に謝罪をしなければならないというものだった。曰く、ネットの記述は公開されたものであるため、選考材料にすることに一切の問題はなく、その当人確認について百パーセントの確証を得ることは事実上不可能であるため

前園は届いたFAXを破り捨てた。

（ミスを認めて謝罪もできない人間が人事なんて務めてたら、会社は傾きます。本社の言うことなんか聞いちゃいけません）

きっぱりと言う前園を見て、寺田はあれはあとで後悔する顔だぜ　と笑ったが、反対はしなかった。

久遠坂和之は皆から頭を下げられ、目を白黒させた。

狼狽した様子で、いいんですよ、全然気にしてません　と言いかけ、いや、と思い直した様

子で付け足した。

「ほんとは、ちょっと頭にきてたんです。でも、こんな風に謝ってもらえるなんて思ってたから、全然気にならないです。むしろ志望度上がりました。だって、組織に属したら、謝るのが簡単にできることじゃなくなるくらい、僕だってわかりますから」

「ちょっと失礼な言い方ですかね、と恐縮する久遠坂の姿は、面接のときよりもずっと素直にみえた。

「天峰の野郎はどうしたんだ?」

「まだ取調べ中のことです。容疑は否認しているということですが、押収された天峰のPCからは、裏クチコミサイトへのアクセスの痕跡があり、遠隔操作のウイルスなどもみつからなかったとのことですよ」

「往生際の悪い奴だな」

「でも久遠坂さんの話を聞いていると、天峰も、根っからの嘘つきではないんだと思います」
私が言うと、久遠坂が頷いた。寺田は、あいつが? と首を捻った。

「天峰、ボランティアサークルをやってるって言ってたでしょう。あれ、本当らしいんですよ」
天峰はとても精力的に活動していたらしい。純粋な目的でやっていたのだ。ところが、どうも

面接の方が上手くいかなかった。周りではサークルを適当に利用していた二本橋みたいな人間ばかりが、内定を取っていく。

天峰は嘆いたのだろう。結局、社会は人間の表面しか見ようとしないものなのだと。

面接のときに天峰が語っていたサークルの話思い出した。あれは正直に生きることに絶望した天峰の、最後の本心だったのかもしれない。

それでも世の中を信じて正直を貫こうとする久遠坂が、天峰は許せなかったのだ。

「でも僕、信じてますよ」

久遠坂ははっきりとそう言った。

「たまに意見がすれ違うこともあるけれど、最後にはわかりあえる。そういう仲だから」

面接がはじまった。

私はノートパソコンの蓋を閉じ、久遠坂の目を見た。結局、前回の面接で、私は何一つ彼のことを見てなどいなかったのだから。今度こそ、人を見たいと思った。

久遠坂は、以前よりずっと自然体の様子で受け答えした。

いや、久遠坂は変わっていないのかも知れない。ネットで、テレビで、人の裏の姿ばかりを覗き見ていたから、私が自分で彼らのいいところを見られなくなっていただけなのかも知れない。休憩時間に、前園がふっと呟いた。

（我々は人の表面を見てはいけない。けれど裏を覗くのではない。人の奥にあるものを見通さないといけないでしょうね）

「それでは最後に、志望動機を教えてください」

「御社は七星グループの一員として、システム業界の」

久遠坂は言いかけ、ふ、と笑って止めた。

悪戯っぽい顔をして、こう言った。

「横上早紀さんがいるからです」

ドアの向こうで盛大に何かが転げる音が響いた。

開けて見ると、廊下で雄大が床に転がり、口もとをひくひくと引き攣らせている。どつやら、気になって来ていたらしい。

私は吐息をついた。寺田と前園は顔を見合わせ、笑いを抑えるのに苦労している。雄大が立ち

上がり、落ちちまえーと叫ぶ声が響く。窓の向こうは桜が色づいている。

春は新入社員の季節である。

もう一つの結末

チャイムが鳴った。

玄関の戸を開けると、彼が立っていた。

「やあ。もう大丈夫なのか？」

僕の挨拶に、彼は答えない。

むっつりと黙ったまま、僕を見上げる。頬はこけ、げっそりとやつれている。僕は玄関の戸口に立ったまま、彼と向かい合った。

「……僕は思い違いをした」

彼はようやく口を開いた。疲れきったような声をしていた。

真っ直ぐにすべてを信じていた以前の彼とは違う、大人びた声音だと思った。

「不思議だった。どうして誰も僕の言うことを信じてくれないのか」

「うん」

「だって僕は本当のことしか喋っていない。僕は殺人予告を書いてない。書いたのはきみだ」

「そうだな」

「でも警察は僕を捕まえた。僕はなにかの間違いだと思った。警察がきちんと調べれば、書いたのはきみだとわかると信じてた。でもいつまで経っても、警察の答えは変わらなかった」

「結論は」

「真犯人が捕まるわけがなかったんだ。だって警察は犯人を捕まえるために、当の犯人から証拠を貰っていたんだから」

天峰は僕の目を見つめた。僕は笑った。

「面接評価裏クチコミサイトのサーバ管理者は君だったんだな、久遠坂。殺人予告の犯人を特定するために、警察は犯人である君自身に捜査協力を求めたんだ」

大事なのは「何故か《ホワイダニット》じゃない。」「誰か《フーダニット》でも、「何か《ホワットダニット》でも、「いつか《ホエ نداニット》でも、「どうやってか《ハウダニット》でもない。」

「何処で起こったか《ホエアダニット》なのだ。」

殺人予告が書きこまれた“現場”を、誰も突き詰めて考えなかった。それは『ネット』なんかじゃない。『裏クチコミサイト』でもない。

『僕の部屋のWEBサーバの中』だ。

何故かなんてここにこだわらずに、何処で起こったことなのかさえ知ろうとすれば、横上は答えに辿りつけたはずだ。

要点は二つある。

第一に、この犯罪において僕は捕まることがないということ。不可能だ。

あの日、裏クチコミサイトの情報開示請求にやってきた警察に、僕は素直にWEBサーバを引き渡した。

僕の部屋にはWEBサーバが設置してある。中には『面接評価裏クチコミサイト』のデータが入っていて、日本全国の就活生がひっきりなしにアクセスし、読み書きしては去っていく。

僕の部屋のWEBサーバが、犯人を特定する唯一の物証なのだ。

証拠を握っている犯人自身に捜査協力を求めるしかない時点で、警察は僕を逮捕などできない。

そして第二に、僕は偽の犯人を創りだすことができる。

警察はログという指紋をもとに犯人を追跡する。地道に現場から犯人の家までの道を追い、書き込んだパソコンを特定する。

犯行現場のログこそが、捜査の発端、取っ掛かりなのだ。

現場に残された犯人の指紋がそもそもダミーだったら、回答を間違わざるをえない。

やり方は以下のとおりだ。

まず天峰の“指紋”を特定する必要があった。IPアドレスと呼ばれるログは、付けられた日時わかる指紋だ。天峰が裏クチコミサイトにアクセスした正確な時刻がわかれば、サーバ管理者である僕には、部屋に残された沢山のログの中から、天峰の指紋を識別することができる。

秒単位で正確な時刻がわかれば一発だ。でなくとも、天峰は何度か、裏クチコミサイトにアクセスした直後に、憤って僕に電話をかけてきていた。数回も事例があれば、通話前短期間ぶんの指紋の中から、重複を掬うことによって、天峰の指紋は僕に知れることになる。

指紋を知ったら、捏造は容易だ。それはコピー&ペーストが可能なデジタルデータに過ぎない。部屋《サーバ》で行われた犯罪。その周囲に付けられた僕の指紋を、天峰の指紋にすべて置換する。WEBサーバのアクセスファイル、サイトのデータファイル。すべてのログにべったりと

天峰の指紋を擦りつけ、予告書き込みの時間もそれに合わせる。仕組みを知ってさえいれば、簡単な作業だ。

そうして警察はWEBサーバのログを辿っていった、書き込みをしたのは天峰だと特定した。はじめりが偽物の痕跡を追っているのだから、いくら正しい捜査をしようと、正しい解には辿りつけない。そしてはじめりの痕跡を疑うことなどできない。犯人と被害者の間の関係性には意識がいつても、犯人とサーバ管理者の間に関係があるなどとは思えない。サーバ管理者なんて所詮黒子だからだ。そこに至れなければ、証拠の改竄の可能性になど行き着かない。

もとより警察なんて問題じゃなかった。たいした技術力なんて持ってない。確たる証拠《データ》に目が向いてしまう警察では、僕の嘘を見抜くことなど不可能だ。

見抜けるとすれば、証拠《データ》ではなく、人間性を見ようとする者だと思っていた。彼女にはチャンスがあった。

横上は警察に、天峰を犯人とする証拠が、何処から出てきたもののかを訊くべきだったのだ。それが他ならぬ僕の部屋から出たものだということさえ知れば、その改竄の可能性について疑うこともできた。彼女には僕と天峰の間の関係性を、あらかじめ知らせておいたのだから。

天峰の言葉を信じられれば、そこに行き着くことはできたはずだ。人間を見てさえいれば。

でも結局、彼女が最後に信じたのは、言葉をかわしあった天峰じゃない。

僕がコピペした無味乾燥な、デジタルデータ。

はじめりの動機は、単純な好奇心だった。

裏クチコミサイトを運営し、警察に情報を提供するうちに、ふとその一捜査の限界《セキュリティホール》に気付いてしまったのだ。自分が神《ルート》である世界《サーバ》で犯罪を起したときに、僕を疑える者が出てくるか否か。

パッチの当たっていないセキュリティホール。思いついたら、好奇心が勝った。サーバへ殺人予告を投下し、読んだ人が通報するのを待った。各社の情報交換スレッドへも呼びこみに行った。物事の動作ロジックを確かめずにいられないのは、パソコン狂いの僕の悪いクセだ。

はじめから天峰を嵌めるつもりだったわけではない。天峰との勝負なんて、どうせ僕が勝つのだと最初からわかっていた。

でも、それでは不十分だと思った。

僕はもっと完璧に、天峰に勝たねばならなかった。自分の中に残された青臭いものを、すべて叩きのめさなければならなかった。僕らはみんな商品だ。想いを持たない歯車になる。

社会に出なければいけなかったから。

「天峰。これが勝負の結果だ」

立ち尽くす彼を見下ろし、僕はそう告げる。

結局、誰も僕の嘘を見抜けなかった。彼の言葉を信じなかった。

犯人と決めつけられてショックを受ける彼の動揺を、嘘を看破された動揺と思い込んだ。誰にも信じてもらえない絶望の涙を、悔恨の涙と思い込んだ。

彼はひたすら正直に、自分の気持ち、想いを、考えを、喋っていただけだったのに。

「僕の負けだよ。久遠坂」

天峰は弱々しくそう告げる。

最後にはわかりあえる。そういう仲だ。

嘘つきの僕と正直な天峰。

「正直に生きたところで、何もいいことなんてないみたいだ」

勝負はついたのだ。

「もう、世の中を信じるのなんて、やめるよ」

僕の中にいつまでも残り続けていた最後の青臭さは、もうそこに居続けることをやめるだろう。その泣き笑いを寂しいと感じていられる時間は、きつともうそう長くはないのだろう。

僕らはこれから社会へ出て行く。

この糞みたいな社会に生きるすべての人たちへ。何を想って生きていますか。そこはこの暗く湿った墓場よりもいいところでしょうか。骸骨の僕らでも生きていきますか。

なあ、一緒に踊ろうか天峰。僕らはみんな、骸骨だ。生者の世界に疲れたら、いつでも墓場へ来たらいい。死神はいつまでも演奏を続けていてやるよ。

郵便配達員が書留を届けた。封書には七星システムの社名が書かれている。

書類を広げると、脇から覗き込んだ天峰が、おめでとう、と祝福してくれた。めでたくはないな、と僕は笑った。

内定通知書。

嘘つきは、内定のはじまり。